

# レンゲの遅まきでアルファルファタコゾウムシの被害を軽減

レンゲの重要害虫であるアルファルファタコゾウムシは、ヨーロッパ原産のマメ科牧草の害虫です。1982年に福岡県と沖縄県で初めて発生が確認されて以来分布を拡大しています。岐阜県では1999年に侵入が確認され、蜜源レンゲに多大な被害をもたらしています。

農作物の害虫の防除とは異なり、ミツバチへの影響、散布費用や労力などの理由により農薬散布の実施が困難なことから、関係機関と連携し農薬を使用しない耕種的防除法を開発しました。



幼虫



成虫

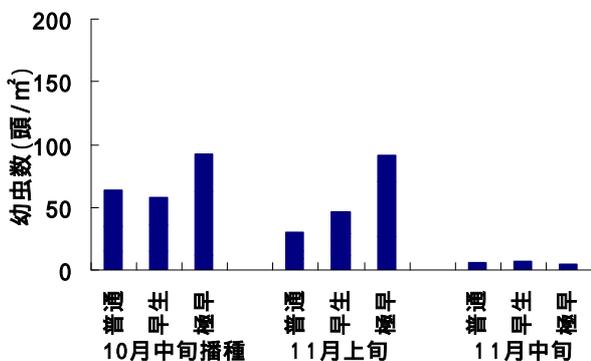


「アルファルファタコゾウムシ」は花芽を食べるため、レンゲが壊滅的な被害を受けています

採蜜を行うため、農薬での防除はできません

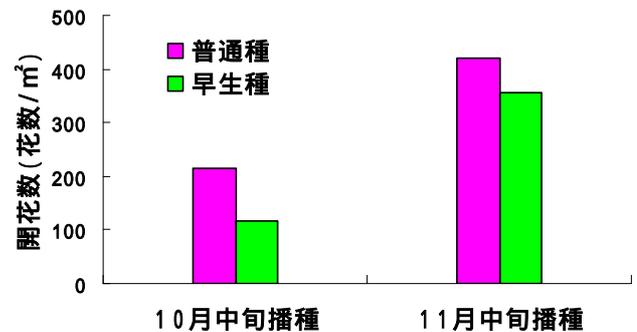
そこで

アルファルファタコゾウムシは、夏眠後の11月頃に餌を求めてレンゲを播種した水田に侵入します。播種時期を約1ヶ月遅らせ、11月上旬～中旬とすることで、侵入時期にレンゲが生え揃っていない状態にして、被害を回避する方法を検討しました。



播種時期とレンゲの品種による幼虫数の比較

遅い時期に播種するほど幼虫数が減少しました。品種では、普通種で被害が軽減されました。



播種時期と品種による開花数の比較(アルタコ多発下)

遅蒔きしても採蜜に最低限必要な開花数(1㎡あたり約200花)が十分確保できました。

## (研究成果)

- ・レンゲの播種を11月上旬から中旬に行い、普通種を使用することで被害が回避できることがわかりました。
- ・レンゲを11月中旬に播種しても、採蜜に必要な開花数は確保できます。
- ・西濃地域を中心に、数十ヘクタール以上の水田でレンゲの遅播きが実施されています。